

大通公園を望む窓辺から

鹿児島と「桜を見る会」

常任理事 目黒 順一

令和元年の夏に九州旅行をした。博多をベースに鹿児島市、熊本市、長崎市をJRでそれぞれ日帰り訪問した。九州新幹線は速かった。

鹿児島市は快晴、高温であった。仙巖園を訪ねて各種施設をじっくり見学した。そこから望む桜島は雄大であった。施設内では島津家の来し方が克明に説明され、貴重な写真と共に江戸末期から明治維新に至る歴史がそこにあった。外圧に耐えながら（例えば薩英戦争など）着実に産業を興し、経済力をつけ、政治的にも軍事的にも大きな力を蓄えていった流れが理解できた。その結果、明治維新に際しては、新政府内での圧倒的な発言力を保持し、鎖国政策で世界から大きく遅れた日本のリーダー的存在になった。とりわけ、第11代藩主の島津斉彬公は北海道の重要性を説き、その意志を受け継いだ黒田清隆を頂点に、永山武四郎をはじめ、多くの薩摩人が北海道の開拓に尽力した。また、当時は不平等条約である日米修好通商条約の解消も悲願であり、明治維新政府の主要メンバーである薩摩人は、文明国家を実現するために欧化政策として鹿鳴館を建設し、舞踏会を開催した。また、1881年に皇室主催で企画・開催された外交官を招待しての「観桜会」もその一環であったという。太平洋戦争での中断を挟んで「桜を見る会」として続いてきたとのことである。北海道と鹿児島の繋がりが身近に感じられたと同時に明治維新における薩摩の影響力の大きさを実感した旅であった。

帰札してしばらくすると、「桜を見る会」がマスコミに大きく取り上げられていた。

仙巖園内の土産店に屋久杉で作った扇子が売られていた。その独特の紋様と木の香りに惹かれて、製作者の方が選んでくれた一品を購入した。今も上着の内ポケットに入れて持ち歩いている。自分が動く度にポケットから良い香りが立ちのぼり、しばし鹿児島を思い出しつつ、先達が思いを懸けた「桜を見る会」の行方を考えている。



「アジア史概説」が面白い…が

理事 山下 裕久

約60年前に高校で学んだ世界史は、四大文明と西欧・中国史が記憶に残るものの、中東やインド近世を含め他地域の記載に乏しかったと思う。卒後、欧州を皮切りにあちこち旅したが、観光の傍らに感じたことがある。40年を隔てて再訪したメキシコでは広い畑をロバが変わらず耕し、エジプトでは都会を一步出ると牛が荷車を引いて古代文明を誇った国が何故との思いが起きた。中国・九寨溝では小型耕運機が動く農家の傍らで、牛の群を追う家が裕福と聞いた。現代農畜業でも国・地域それぞれである。

トルコで大都市イスタンブールからカップドキアを経て通った高地には、時代に取り残されたひなびた村があった。アララト山やチグリス川の源流、ヒッタイトの鉄器の発明等々を想い、西海岸のトロイ・ギリシャ・ローマ時代の遺跡を巡って、東西の衝突がこの辺りで繰り返されたことも思い出した。中東の歴史が面白い。

最近「アジア史概説：宮崎市定著(中公新書)1300円＋税」を手にした。民族の移動、地域・国の盛衰、その変化の理由と解釈があつて、値段をはるかに超える読み応えがあつた。また国の盛衰について、塩野七生の「逆襲される文明・日本人へIV」の巻尾には、リストラしないで持てる力と人材を活用して国を立て直すのと、リストラしてでも繁栄を手にするやり方を比べると、長期的に見れば前者が成功し、前者がローマとヴェネチアで後者はギリシャやフィレンツェ、とあつた。我が国はどうかのなあ。

正月に家族が集った時「お屠蘇ってなあに？」と聞かれ、今風にスマホで字を確かめた。屠の尸は屍偏で危険な字群と気づき、屠は「ほふる」蘇は「よみがえり」で屠蘇はヨモギに似た草の名とあつた。なるほど、屠蘇は旧年の不都合を消して新年にリセットする行事。シヴァ神は破壊と創造の神と連想し、今年が平穏であるよう願ったところで、トランプ政権のイラク司令官殺害の報が届いた。令和2年の幕開けである。